國學院大學学術情報リポジトリ

《個別報告一》エスニック・ツーリズム開発に伴う民族間関係の変化：中国雲南省における回族社会の事例から

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-10-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 奈良, 雅史
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001062

《個別報告一》エスニック・ツーリズム開発に伴う民族間関係の変化
―中国雲南省における回族社会の事例から―

奈良雅史

モスクにおける非ムスリムへの対応

ただいまご紹介にあずかりました北海道大学の奈良と申します。本日は宜しくお願い致します。テーマは「エスニック・ツーリズム開発に伴う民族間関係の変化―中国雲南省における回族社会の事例から―」ということで報告させていただきます。

私が中国の雲南省のモスクに行き、調査をし始めた頃、モスクに行くとよく言われていたのは「お前は、何族なんだ」ということでした。例えば私が「日本人だ」と言っても「だから回族なのか、漢族なのか」とさらに聞かれ、「ここは回族のイスラーム系少数民族の人たちの場所であるから帰れ」といったようなことを言われました。

このように、私が経験したことからも分かりますように、モスクという場は観光客の来訪をあまり歓迎しない傾向にあります。事例として、立て看板の「観光客立入禁止」ですとか、「写真撮影禁止」といった注意書きからもムスリムの人たちが非ムスリム、あるいは他の民族に対して、排他的である傾向が強いことがうかがえます。

また、非ムスリムの人たち、主に漢族の人たちは、モスクやムスリムの人たちが集まる地域にあまり近付かない傾向があります。

モスクの礼拝では、金曜日が男性の礼拝日なので、男性が沢山モスクへ礼拝に来ていますが、ここはムスリムが集まる場所のため、ムスリムではない人が来ると、「帰るように」というようなことを言われてしまいます。中国においてイスラームの歴史は一四〇〇年ほどありまして、伝統的なモスクは一見すると、仏教寺院と変わらないような建築様式になっています。

このように、相互に近付かず、排他的であるという状況が見られたのですが、近年になってくると、回族の人たちの中に観光客を積極的に受け入れる傾向というのが見られるようになってきました。

例えば、今日取り上げる事例でいいますと、モスクの中に観光客を案内する案内係を設置するといったことが見られます。さらに非ムスリムの側としてもムスリムの集まる地域に観光に来るようになり、モスクの見学がツアーに組み込まれているといったようなことも見受けられます。

先ほども申し上げましたように、双方に排他的であった状況から、このように相互に近付いていくというような変化をどのように理解することが可能かということを今日は考えていきたいと思います。

問題の所在

マイノリティと観光の関係は先行研究において、一つの大きなテーマとして扱われてきたのですが、特にマイノリティを主体とした民族観光は、国民形成の装置として働いてきた（[e.g. Bruner 二〇〇一; Stronza 二〇〇一]）と言われます。その結果、観光の場で民族をいかに表象するかですとか、あるいはいかに民族文化の真正性というのを位置付けていくかというポリティクスの生じ方について議論がなされてきました。そして、民族観光というのはエスニシティや民俗文化の再構築を促すものである（[e.g. 太田 一九九三; Hoskins 二〇〇二]）というような議論がなされてきたわけです。

中国における民族観光に関する先行研究においても同様の傾向が見られます。民族観光というのは民族文化をめぐるポリティクスのアリーナとなってきました。そこには、主に参加するホストたちはリベラルな「抵抗」の主体であるという前提で議論されてきた（[e.g. Doorne et al. 二〇〇三; Komlosy 二〇〇四; 彭 二〇〇四; 曽 二〇〇一; Sun & Zhang 二〇一四]）ということが言えます。果たして、そうなのかということが、今日の議論のポイントの一つです。

もう一つ、民族間関係というところに焦点を当ててみますと、民族観光開発が民族間関係に大きな影響を与えてきた（[e.g. Gamper 一九八一; Jamison 一九九九]）と論じられてきました。

また、国民形成という点でいい方向に働くということの一つに民族間関係が民族観光に伴い、民族間の接触が増えることによって、協働する機会が生まれ、より大きなレベルでのアイデンティティの確立の構築がなされ、民族間対立が緩和されるのだという議論がなされてきました。

一方で、観光資源をめぐる競合によって、民族間対立（[e.g. Jamison 一九九九]）とも言われてきました。

ここで問題なのは、観光開発に伴う民族間関係の変化を、先行研究においては、観光のみに還元して理解する傾向にあったということです。

以上を踏まえまして、今日の報告の目的と致しましては、前述の回族社会における観光にみられる民族間関係の変化について、民族文化をめぐるポリティクスおよび民族観光開発による影響の所産として捉えることの可能性とその限界について検討することとしたいと思います。

調査地の概要（紅河州箇旧市沙甸区）

雲南省はミャンマー、ラオス、ベトナムといった東南アジア地域に接している中国西南部にあります。紅河州の中に箇旧市がありまして、さらにその中にある沙甸（サデン）区という地区の事例を今日はお話させていただきます。

沙甸区は、総人口約一万三千五百人の小さな町で、その内九十パーセント程が回族と呼ばれるイスラーム系少数民族の人々です。この地域の人口は多くはないのですけれども、歴史的には多くのイスラーム学者を輩出している地域です。例えば現在、中国の中で最も普及している中国語のコーランを訳した馬堅（ウラマー）先生は沙甸の出身で後に北京大学の教授にもなられています。

このように、有名な学者を輩出しているということもあり、沙甸区は歴史的に中国イスラームの中心の一つとされています。なぜ、今日、沙甸区を取り上げているのかと言いますと、平成二十二（二〇一〇）年八月に沙甸大モスク（雲南沙甸大清真寺）という、中国で一番大きなものの一つと言われるモスクができたからです。その建築費は、一億一千万元なので、日本円にすると、十六、十七億円ほどの巨額の資金を費やして作られたものです。一万人が同時に礼拝をできるように設計されていますので、沙甸に暮らしているほぼ全てのムスリムがモスクに集まって礼拝が

できるというようなものになっています。それに伴い、モスク周辺をアラビア風の景観に造成した結果として、観光地の一つになってきました。今日はその地域を事例としてお話させていただきます。

回族とは

回族について簡単に説明させていただきますと、主に唐の時代から元の時代にかけて中国に移動してきた外来のムスリムの人たちがイスラームに改宗した現地の主に漢民族、漢人の人たちと通婚して形成されてきた民族集団とされています。人口は約一千五十万人程で、中国のイスラームというとウイグル族の方が日本では馴染みがあるのではないかと思いますが、ウイグルの人々よりも人口が多く、中国最大のムスリムマイノリティとなっております。このように、彼らは長い年月を中国で暮らしてきたために、母語として漢語を話す人たちです。

もう一つの特徴としては、これも歴史的な原因があるのですけれども、回族は中国全土に暮らしています。ですので、北京に行っても、ムスリム、回族の人たちはいますし、広州や上海にも居住しています。

回族の特徴は、全国各地で漢族を中心とする他民族と隣り合って生活してきた点にあり、彼らはその中でモスクを中心とした小規模なコミュニティを作り、モスクを中心に集住してきました。もう一つ、回族の人たちの特徴を挙げておきますと、彼らがかなり政治的に創られた民族であるということが挙げられます。中国、中華人民共和国の中で回族と呼ばれている人たちは、台湾に行くと漢族のムスリムと言われ、少数民族ではありません。中国の中で、民族として認定されているのは、中国共産党による民族識別工作によって民族と認められた人たちです。その民族識別工作ではスターリンの民族定義四原則（①言語、②地域、③経済、④文化〔心理状態〕）が用いられ、特定の同一の言語、特定の集住地域、その民族に特徴的な経済活動、文化が基準とされました。これにも、当時の歴史的な背景があるの

ですが、今日は時間の関係で割愛させていただきます。本来は全ての基準を満たす社会集団が民族として認定されるのですが、回族の人たちは、④文化〔心理状態〕にイスラーム信仰が当たるということで民族として認定されました。

民族観光の展開

では、今日取り上げるテーマの一つである民族観光ですけれども、一九八〇年代以降に改革開放が始まって以降展開してきました。中国のインバウンド、中国人旅行客が今でも沢山来ておりますけれども、八十年代に中国国内旅行が大きく発展してきました。例えば、平成十四（二〇〇二）年には、中国国内旅行者数が八億人を超え、世界最大の国内旅行市場が形成されたと認知されています。そうした過程に伴いまして、民族観光も発展してきました。八十年代半ば以降、国家主導で各地に民族テーマパークが開園されました。その目的は、少数民族地域の観光開発であって、特に沿岸部と内陸部の間の経済格差の縮小ですとか、あるいは少数民族を中華人民にしていくという国民形成の促進という意図があったとされています。

雲南省に暮らす少数民族には、例えばナシ族とか、ペー族とか他にも少数民族がいます。観光資源がそれほどあるわけではないのですが、イスラーム系少数民族の地域もその例外ではなく、観光開発の対象になっていきました。

雲南省の中心である昆明市の中にある雲南民族村という民族テーマパークでは、雲南に暮らす二十六の民族の生活に関する資料を集めて展示しています。この展示の中にも回族の人たちのセクションがあります。さらに、イスラームに特化したものとしては、今日取り上げる事例の場所とは違いますが、雲南省東北部の昭通という地域では、回族が暮らす比較的大きな街の中にイスラームをテーマにしたテーマパークのようなものが造られました。その後、完成した様子はまだ見に行っていませんが、農村の中にテーマパークが建てられている写真をネットで見ることができます。

このように、回族というムスリムの人たちが集住している地域の観光化も活発化してきており、特に二〇〇〇年代以降、それが顕著になってきました。というのも、当時の胡錦濤政権の中で、「和諧社会」、調和のとれた社会というスローガンが掲げられていまして、それまで、非ムスリム・他民族に排他的な傾向にあった回族集住地域に観光客も少しずつ訪れるようになりました。

例えば、先ほども申し上げましたとおり、モスクに観光客対応の部門を設置し、観光客の受け入れに積極的に取り組んでいくというようなことがありました。このように一見すると民族観光開発に伴い、民族間、それまで、ある種没交渉であった民族間関係が好転してきたというふうにみなせる面もあるかと思います。

これまでは、中国全般の少し広いお話でしたけれども、今日取り上げる沙甸という地域に関して、もう少し具体的に見ていきますと、平成二十二（二〇一〇）年に大モスクというのが建設されました。それに伴いまして、政府の方ではこの地域を観光地として認定していくことになりました（「中国・沙甸回族文化旅游小鎮」箇旧市年鑑編輯組編『箇旧年鑑二〇一三』雲南美術出版社、二〇一三年）。

そして、観光散策路などの整備が行われて、当時、政府は二十九億元を投資する予定だったと、公文書には書かれています。二十九億元ですので、一元が十五円位とすると、何百億円になりますね。かなりの額でした。平成二十五（二〇一三）年時点でも既に五億元以上が投資されているとのことでした。平成二十四（二〇一二）年には中国では観光地を国家A五級とか、A三級とかランク付けをしているのですが、この沙甸という地域は国家A四級の景区、観光地というものになりました。先ほど、写真でお見せした雲南省の民族系のパークもです。ですので、一万三千人ほどしか暮らしていない小さな村みたいなところがかなりの観光地として政府のお墨付きを得たという状況ですね。そうしたこともありまして、翌平成二十五（二〇一三）年には観光客数が十五万人を超え、観光収入も二百万元以上に

なったといわれています。

こうした状況を踏まえまして、平成二十六（二〇一四）年に大モスクでは観光客対応の案内係を設置しました。この時期から、沿岸部、例えば上海などから来る観光客のツアーが大型バスで雲南地域を回るツアーの中に沙甸という地域も組み込まれるような状況になっています。写真をお見せすると、大モスクというのは、**【写真1】**のように、大変大きなモスクで、夜になるとライトアップしていて、綺麗な感じになっています。

先ほど、アラブ風の景観づくりについてお話をしましたが、道路標識が漢字、英語、アラビア語で表記されています。回族の人たちの母語はアラビア語ではないので、彼らがアラビア語を公式な標識に使うというのは、かなり特殊な状況で、あまり他ではない状況です。

そして、モスクの前にドーム屋根をあしらった文化芸術館という施設が造られ、地域のイスラーム書道の作品などが展示されています。この建物の反対側にも同じくドーム屋根があしらわれた建物があります。

ここで、モスクにおいて観光客を積極的に受け入れている事例を少し具体的に見ていきますと、平成二十六（二〇一四）年に大モスクでは中国だと「接待部」という案内、ガイド係のような係を設置しまして、かつ、モスクでボランティアを募集して、観光客に対してガイドをするということが行われるようになりました。平成二十八（二〇一六）年には、ボランティアは十代から二十代の回族を中心に三十四名の人たちが携わっていたと言われます。

【写真1】　沙甸大清真寺（モスク）（報告者撮影）

ですので、先ほど、冒頭でも申し上げましたとおり、それまでの回族の人たち非ムスリムがモスクを訪問することを嫌う傾向にあり、「この場所は回族の場所だから、回族でないのなら帰れ」というようなことを言うような感じでしたが、大きな変化が見られました。

ここで、なぜ沙甸でこのような観光客を受け入れるようになり、また観光客が来るようになったのかということを少し考えてみたいと思います。例えばガイドの責任者は、イスラーム教育を専門的に受けて、宗教指導者の資格を持っている人で、主にボランティアのタイムシフトを作り、組織して、観光客の案内をしています。そのうえ、夏には、水を無料で提供したり、地元のお菓子を無料で振舞ったりなどして観光客に手厚く対応していました。

上海からきた大型バスのツアー客が来た際には、例えば、ガイド責任者が観光客を案内していました。モスクの中には非ムスリムは基本的に入ることができないのですが、ガイド責任者が礼拝している状況を観光客に見せて説明していました。

また、観光客だけではなく、色々な人が来るようになっており、中国では結婚するときに写真集のようなものを作りますが、その撮影に来ている場面もありました。この時は、回族の人たちが撮影で来ていましたが、回族に限らず漢族の人たちも撮影に来ることがあるということです。雲南省は少数民族が比較的多いのですが、近くに住んでいる少数民族の人たちも、何をすることもなく遊びに来ていました。礼拝をする時間になったときに女性たちが腕とか足とかを露出しているのは宜しくないということで、ボランティアの人が女性たちに「今から礼拝で人が来るから、そうした格好でいられると困ります」と注意していました。

夜になると、先ほど、写真でお見せしたように、モスクがライトアップされて、綺麗なので写真を撮影して帰るような状況が大変多く見られます。現地の人は、このような状況を踏まえて、「沙甸は無料の観光地なんだよ」といっ

たことを言っています。実際、ここに入るにあたり、特にお金を支払うことはありません。

観光客に対してどのように回族やモスクに関して説明するのかということを見てみると、一つは政府の民族に関する言説に則った説明をしています。自分たち回族が、多様な中華民族の一員であるということを主張します。

あるガイドが漢族の観光客に対して話していたことですけれども、「われわれ中華民族にとってまず重要なのは『愛国』であり、われわれ回族はそのうえでアッラーを信じ、『愛教』をしています」と説明していました。「愛国愛教」という政府のスローガンがありまして、それを使って観光客に自分たちの信仰のあり方を説明していたということです。

また、モスクの前が広場になっていますが、そこをモスクの人たちは和諧広場と言い、先ほど、胡錦濤政権で「調和のとれた社会」というのがスローガンになっていたと申し上げましたけれども、そのスローガンを取り、「和諧広場」と名付けているのです。それを説明する際に「われわれのモスクには壁がなく、誰もが入ることができます」、「ここからみえる広場は『和諧広場』といって、民族団結の場です」といったことを言うわけです。

このように見ていきますと、一見すると、回族の人たちは国家主導の国民形成などを目指す、民族観光開発に則って、観光客を受け入れているように見えます。

【写真 2】　モスクにやって来る観光客たち
（報告者撮影）

あるガイドの一人の語りを見てみると、「ニュースなどの影響でムスリムはみなテロリストだと思われたりしています。われわれは相互交流し、お互いの理解を深める必要がある。イスラームは平和の宗教なのです」と言っていました。

一方で、観光客の沙甸訪問に関する語りを聞いてみますと、「これまで回族についてはあまり関心がなかったけれども、沙甸には中国で一番大きいモスクがあると聞いたから見に来てみました」というようなことが語られています。こう見てくると、観光開発に伴いまして、民族間での接触が促進され、そこでの相互理解というものが期待されている状況であることが見えてくるわけです。

また、回族にとってネガティブなムスリムイメージに対抗するための自己表象の場として民族観光が機能している、あるいは民族観光開発に伴って民族間の接触の機会が増加している、というような理解ができるかと思います。

結果として、相互に排他的な傾向にあった回族と非ムスリムの他民族との関係が好転してきました。その意味で、民族観光が新たな民族間関係を生み出しているというふうに考えられるのではなかろうか、といえますけれども、それで良いのかという話です。しかし、今日、取り上げている沙甸という回族集住地域では、民族観光が、イスラーム復興とかなり密接に関係している面があります。

イスラーム復興と回族の民族・宗教性の変化

中国では一九八〇年代以降、文化大革命が終わり、改革開放政策が取られて以降は宗教政策の緩和に伴い、イスラームに限らず、宗教が急激に復興してきた状況があります。その流れの中で、この地域では、伝統的なモスクは中国風な建築様式ですが、それがアラブ風なものに建て替えられていくとか、ドーム屋根をあしらった家屋を造るとかいったようなことが活発化してきました。

また特に、この沙甸という地域ではアルコールの販売をなくそうという運動も展開してきました。ですので、景観の「イスラーム化」というのは、このイスラーム復興の流れの中でも捉えていかなければならないことであり、それはムスリム集住地域の民族観光開発と同時に進展してきたということが言えます。

特にアルコール排斥運動についてみて見ますと、平成十九（二〇〇七）年から沙甸区では、アルコールの販売が禁止されてきました。法的な拘束力はないのですが、モスクの人たちが「販売を禁止する」と言って回りました。宗教指導者や一般の信徒の有志がそれを始めて、週に二回ほど町の中を見回って、アルコールがあると、それを没収して廃棄しました。町中にはアルコールの販売や飲酒の禁止を訴えるポスターも掲示されるようになりました。

このように、観光開発が起こる前において沙甸区においてイスラームが公共の場に拡がり、町全体を秩序化しているような状況が見られたと言えます。

例えば、平成十九（二〇〇七）年当時だと、**【写真3】**のような「酒は理性を酔わせる毒だ」というようなことが書かれているポスターがいたるところに貼られていました。こうした状況とイスラーム的な景観が造られていく、あるいは大きなモスクができて、そこが観光地になっていくことがパラレルに起きてきたとみなせるわけです。

そのうえ、こうしたイスラーム復興の中で、回族の民族的なありかた、エスニシティですとか、宗教性というものが変化してきたということも無視できない事象になっています。モスクが建て直されることやアル

【写真3】　アルコールの販売や飲酒の禁止を訴えるポスター（報告者撮影）

コールを販売禁止にするといったようなことに現れますように、一九八〇年代以降、イスラームに関する活動が活発化してきました。

また、昆明市でいうと、メッカ巡礼者数が昭和六十四（一九八九）年では二名だったものが、その二十年後には百十三名と急激に増えてきたということがあります。そうしたイスラームに関する活動の活発化に伴って、回族の中に敬虔になっていくような人たちが現れてくるようになりました。

そして、中東への留学経験者ですとか、イスラーム思想に関する漢語訳の書籍の流通、あるいはイスラーム系ウェブサイトの拡大によりまして、厳格なイスラーム言説の影響力が増してきました。結果として厳格にイスラームを実践すべきだという考えが広がっていき、そこで「中国的」な要素はどんどん排除していこうというふうに考えられるようになってきた傾向があります。

中国におけるイスラームの歴史では、中国に渡ってきたムスリムの中国での暮らしが何百年にも及び、アラビア語が既に母語ではなくなっていますので、礼拝をするためにアラビア語を学ばなければならない状況になりました。その際に、漢字の読み仮名を振って、アラビア語を読むといったような学習方法が作られてきたために、標準のアラビア語からすると、かなり訛ったアラビア語が多くの回族社会の中で礼拝などの際に使われるようになりました。ただ、結果として、回族というカテゴリー、その民族的なカテゴリーとムスリムという宗教的なカテゴリーが分けて考えられるようになってきました。それまでは、回族であるという血縁とか、あるいは中国の制度、民族制度によって決まる属性としての「回族である」ということと、ムスリムであるということが不可分なものとして、特にそれを分けて考えるという概念がなかったのですけれども、このように厳格にイスラームを実践することが、重視されていく中で、ムスリムであるということの条件が厳格にイスラームを実践することであるとみなされるようになってきました。そ

のため、血縁や制度によって決まる属性としての「回族である」ということと宗教的なカテゴリーとしての「ムスリムであること」は異なるものと考えられるようになってきました。

つまり、回族＝ムスリムという民族・宗教性というエスニシティと宗教性が一体になっていたものから「ムスリムであること」とエスニシティが切り離されるようになり、今日の冒頭で例えば、私がモスクに行くと「お前は何族か」とよく聞かれたというお話をしましたけれども、だんだん「お前は何族か」と聞く人が他の回族から「ムスリムと言わなきゃいけないよ」と注意されるようになりました。「日本人に回族はいないし、回族というのは中国の少数民族だから」、といった話になりまして、こういう時は「ムスリムか」と聞かなければいけないんだ、という意識が生まれてくるわけです。

民族観光の諸相

結果として、ムスリムであるということは、イスラームを実践することで、回族に限らず、後天的に獲得される属性として、捉えられうるものになってきました。どういうことになるかというと、非ムスリムの他民族が、例えば私とかもそうですけれども、潜在的にはムスリムだと見なされるようになってくるわけです。今日の冒頭でお話しましたように、回族ではない人がモスクに行くと、「お前らの場所ではないから帰れ」と言われていたのが、今ですと、回族ではないけども、イスラームに関心があって、この人はイスラームに改宗するかもしれない、というような期待がもたれる、というふうに変化してきたわけです。

このようなことを踏まえて、民族観光の場を捉え直してみると、また違う様相が見えてきます。彼らの話をよくよく聞いていくと、観光というのは、イスラーム信仰を伝える場だと捉えられています。

例えば、アッラーやムハンマド、クルアーン、イスラームにおける女性の位置づけ、礼拝の仕方などを彼らがガイドする際に観光客に伝えますけれども、これを彼らはイスラームの宣教とみなしています。

ガイドを行っているある男性は、「預言者ムハンマドや回族の祖先が中国に来てばかりの頃は、自分たちから宣教に外へどんどん行かなければならなかったけれども、今は黙っていても観光客が来てくれる。それはとっても幸せなことなんだ」と観光客の増加について語りました。また先ほど、結婚用の写真を撮りに来る人たちがいるというお話をしましたけれども、それに関して話しているときに彼は「最近は毎日一組以上は、結婚写真を撮りにモスクに来る人たちがいる。その中にはムスリムじゃない人たちもいるけれども、それだって、彼らがイスラームに触れる良い機会だと思うんだよ」と語り、ポジティブに捉えているわけです。さらにそうしたガイドの設置に関しても「沢山来てくれるようになった観光客にもっとうまくイスラームのことを伝えられるようにモスクの案内係の育成に力を入れていかなければならない」とイスラーム教育に携わる四十代男性が語っていました。

このようにホストである回族の側としては、観光がイスラームを伝える、宣教する場として捉えられている一方で、観光客の人々も大きなモスクを見たいなどといった異文化に対する興味を持っているというだけではなく、観光に来る大きな要因として、沙甸が近年テロリストの巣窟とみなされるようになってきたことが挙げられます。

平成二十六（二〇一四）年三月一日に、雲南省の政治経済の中心である昆明市の昆明駅で百七十人以上の死傷者を出すテロ事件が起きました。そして、その事件はウイグル人過激派の人たちが行ったと言われています。中国全土においても衝撃的な事件でしたが、その犯人グループが犯行の計画を立てて、訓練していたのが沙甸だと報道されました。そして、このように注目された結果として、アルコール排斥運動も注目されまして、例えばネット上の反イスラーム主義者からの大きな反発を招くことにもなりました。

ただ、それで単に「沙甸は危ないところだ」と言われてしまうだけかと思いきや、事件後、観光客が一層増えてきたと言われています。この事件の話をするとガイドの人たちは、「非ムスリムの観光客はその事件があっても減っていない、むしろ増えているんだ」、「テロリストが集まる沙甸がどんなところか、興味本位で見に来ているんだ」と語りました。

つまり、事件によって中国最大のモスクの一つがある沙甸とイスラーム的な景観を備えた沙甸を知る人が増加し、結果としてより多くの観光客が沙甸を訪れるようになったわけです。例えば、事件のあった翌年の旧正月の頃には、一日で二千人以上の観光客が訪れていますし、周辺の少数民族も来るようになっている、と言われます。

民族観光とイスラーム復興のもつれ

そろそろまとめに入っていきますが、このように見てくると、民族観光というものがこの沙甸という地域においては、イスラーム復興とかなり深く相互に関係しながら展開してきたと考えられるかと思います。

回族にとっての民族観光は、ムスリムの表象をめぐるポリティクスの場としても捉えられますが、それだけではなくて、彼らにとって観光客の受け入れはイスラーム復興という文脈と大きく関連しているということが言えます。というのも、より「純粋」な、ここでいう「純粋な」というのは、中国的な要素を排除しイスラーム信仰への志向という、一見排他的な回族の民族、宗教的なあり方の変化が、ある種逆説的に、回族が他民族を受け入れる余地を拡げてきたためです。

ですので、政府によって主導されてきた民族観光開発を通じて「私たちはみな中華民族だ」といった国民意識が醸成されることにより、民族的アンデンティティが後景化することによって、民族間関係が変化してきている、とだけ

言えるわけではないと言えます。

回族にとって、民族観光は、むしろイスラームを宣教する場として捉えられています。そこでは、彼らの、民族アイデンティティがどうであるか、あるいは自己表象をどうしていくかということは、それほど重要な問題として捉えられていないと言えるだろうといえます。

国民形成がうまくいったことで、沙甸の回族あるいは回族の人たちと非ムスリムの他民族との民族間関係が好転しているというようなことでは必ずしもないわけです。ですので、異なる意図を持ったアクターがここでは、共存しているとまでは言えないかもしれませんが、共在しているような状況が生まれ、回族を他者化しようとするゲストと彼らにイスラームを伝えようとするホスト、それぞれの利害がズレながら彼らが出会う場が生まれていると言えます。

それを生み出しているのが、ここでは観光開発であったと言えるかと思います。それまで、回族の人たちも非ムスリムの人たちを積極的には受け入れないということもありましたし、漢族を中心とした非ムスリムの他民族の人たちもあえて回族が集住している地域に訪れないということがありましたが、観光開発に伴い、こうした異なる意図を持ったアクターが出会う場が生まれてきたといえるかと思います。

そもそも、そのような漢族と回族が出会うような場が政治的に制限されてきたということもあります。例えば、宣教活動みたいなものは政府から非合法な活動として扱われており、回族が回族ではない人たちにイスラームについて語るという場が、そもそも設けにくい状況がありました。しかし、観光開発がそうした場を生み出してしまう、というわけです。

総括

政府主導の民族観光開発が民族間関係を政府が意図したものとは違う形で開かれたものにしていく可能性があるのではないか、ということが、今日の発表の結論となりますが、最後に少し最近の調査結果を皆さんにシェアさせていただきたいと思います。そこから見えてくるのは、政府の規制が一層厳しくなっている状況です。その点も踏まえて、皆さんと議論できればと思います。

例えば、【写真4】のこの道をまっすぐ行くと、先ほどお見せしたモスクに着きます。この手前が、街道になっていまして、ここが沙甸に入る大きな入口の一つになっています。ここには、大きく政府のスローガンが掲げられています。これ自体はあまり特別なことではないと思われるかもしれないですが、昨年まではこの町の入り口というのは、このような政府のスローガンは大体的に掲げられていませんでした。

そして先ほど、この地域の中では、漢語と英語とアラビア語で道路標識が表記されているとお話しましたけれども、現在は英語と漢語（漢字）だけの標識が立てられるようになってきました。

さらに、先ほど申し上げた街道からモスクに至る通り沿いの全ての街灯に小さなプラスチックで出来た国旗が設置され、それが夜になると電飾で赤く光ります。

【写真4】　沙甸大清真寺へ向かう道路に掲げられる政治スローガン（報告者撮影）

また、モスクの入口前に六つの丸い電飾が設置されました。これは中国的な特色のある社会主義の革新的な価値観を表したものです。

この地域の観光地化の大きな特徴の一つとして、イスラーム的な景観の形成があったわけですが、中国的ではないことが批判されるようになってきました。そのため、現地では今、やや文革に近いような状況が生まれてきているのではなかろうかと危惧をする声も生まれてきており、今日、お話したような状況にも変化が見られます。

例えば、このモスクの前に派出所がありますが、現地のムスリムと観光客があまりに長々と話していると制止されてしまうというような、モスクの人たちと観光客の接する場を制限するような状況も生まれてきているそうです。

このように政治的に厳しい状況が見られるようになってきてはおりますが、今日お話したように回族が政府の政策をうまくかわしていく可能性もあるだろうということで、本日の発表を終えたいと思います。どうも有難うございました。